

企画展「はやぶさ帰還10周年」

小惑星探査機「はやぶさ」

今年2020年は、小惑星探査機「はやぶさ」の地球帰還から10周年の年にあたります。

「はやぶさ」は、2003年に打ち上げられた、日本の小惑星探査機です。「イトカワ」という小惑星へ到達し、その表面に着陸し、表面の物質(岩石)を採集してそれを地球に持ち帰ることを目標としていました。地球外の物質を地球に持ち帰る、という任務は、非常に重要かつ斬新な挑戦でした。

ほとんどの探査機は、カメラや分析装置を搭載し、その画像や



はやぶさ5分の1スケールモデル

分析データを地球に送信するのみで、地球に帰ってくることはありませんでした。例外といえるのは、アポロ計画をはじめとした月探査計画です。人類は、月の石は手にしていました。しかし、月以外の天体の物質は、隕石として自然に落下してきたもの以外、2003年当時の地球にはなかったのです。(はやぶさの打ち上げ後、ジェネシスが太陽風粒子を、スターダストが彗星のダストを地球に届けました。)

はやぶさは、2005年11月に、小惑星イトカワへの着陸を果たしますが、その後起こった燃料漏れに起因する姿勢制御の喪失により、電源の喪失と通信途絶に見舞われます。地球帰還は絶望的とも思われましたが、懸命な救出作業により、当初の



はやぶさ帰還カプセルのレプリカ

写真提供:ぐんま天文台

計画の2007年から3年遅れで2010年6月に地球に帰還することになりました。

2010年6月13日日本時間22:51、「はやぶさ」は、オーストラリアウーメラ砂漠上空の大気圏に再突入し、イトカワの表面物質を収めた帰還カプセルを地上に届けました。



はやぶさ帰還時の全天周写真

©JAXA/大阪市立科学館

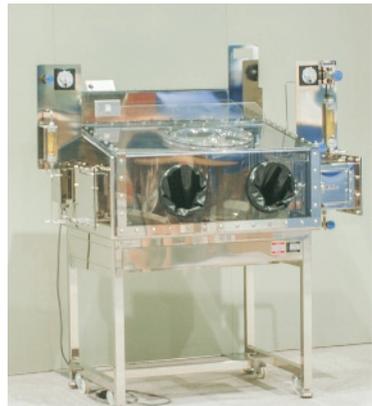
企画展で「はやぶさ」ゆかりの品々や映像を展示

数々のトラブルを乗り越えての地球帰還は、多くの人の注目を集め、「史上最も愛された探査機」と言われるほどのブームを巻き起こしました。

企画展「はやぶさ帰還10周年」では、はやぶさプロジェクトの全体像、はやぶさの地球帰還観測とカプセルの回収作業やその後の分析、一大ブームとなった当時の世相などを紹介する展示品や映像をご覧ください。また、今年の終わりごろに計画されている、はやぶさ2の帰還についても紹介します。

この企画展で、10年前のはやぶさ帰還当時の熱気を思い出していただければと存じます。

会期は5月19日(火)から7月12日(日)の予定です。



キュレーショングローブボックス
イトカワから回収した試料を取り扱うための装置。

飯山 青海(科学館学芸員)